
猫の葬儀屋と狐と妖。

湊奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の葬儀屋と狐と妖。

【Nコード】

N4349X

【作者名】

漣奈

【あらすじ】

ある寂れた繁華街

肝試しにはうってつけなビルに、その二人はいる。

セーラー服にベレー帽を被った少女と、グレーのスーツの中年男。

ちぐはぐ、かつ犯罪臭漂う二人は『火車葬儀社』。

これは二人の不思議な葬儀屋が紡ぐ、とても不思議で優しいお話。

注意！

この作品は1話と2話のみフォレストページの「幻想図書館」にて
投稿しています。

(このカテゴリーがファンタジーでいいのか、誰かアドバイスく
ださい！)

ブローグ：猫の葬儀屋と狐と、日常。

「ひーまーやー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ひーまーやー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「飯綱イヅナーあ、自分、聞こえとる？」

「そんな声上げなくても聞こえてますよ、火車ヒケルマさん」

某県某市、ある寂れた繁華街。いかにも「ナニカ」が出そうな古いビルに、少女と男がいた。

少女は室内にありながらも桜色のベレー帽を被り、どこかの学校の物と思しきセーラー服を着ていた。今日は平日だが、少女はそもそも学校に通っていないので何の問題もない。窓の外の景色を退屈そうに眺めながら、くわえたポツキーを上下させていた。三つ編みにした艶やかな黒髪を垂らし、けだるそうに外を見る瞳は黒く澄んでいる。目鼻立ちは帽子に隠れてわかりにくいだが、かなり整った顔立ちなのはすぐに分かった。年齢は、大体十六から十八ほどだろうか。

「今日も客、来こあへんな」

ポッキーを食べ終えた彼女は、関西人独特のイントネーションで男に声を掛ける。

「そりゃこんな潰れかけのビルに葬儀社作ったらそうなりますよ！」

ダン、と机を叩いて男は叫んだ。

心なしか白い物が垣間見える黒髪を短く刈り、全体的に疲れた雰囲気醸し出している。散々苦勞した末に妻に逃げられたサラリーマン、というのがぴったりだった。

四十代、あるいは老け顔の三十代あたりに見える。

サラリーマン風の男が平日の昼間にこんなビルに、しかも女子高生と一緒に 傍から見れば犯罪臭漂う光景だが、この二人に関して言えばそういった事とは無縁であった。

「つまりアレかあ？ 天性パシリの飯綱は、この会社の意味も知らずに客の来おへん現状をウチのせいにしたと。んな台詞は百万年早いわこのパシリ田パシ男！」

「誰もそんな事言ってます、人間の一般常識です！ というか貴女に勝てると思ってません！」

大の大人をからからと笑い飛ばす、少女の名前はヒケルマミカ火車美香。

対して、そんな彼女にため息を零す男の名前はイツナサノスケ飯綱左之助。

このビルの一室を本社兼住居として使用する、「ヒケルマンウギンヤ火車葬儀社」の社長と唯一の従業員である。

「火車さん、どこ行くんですか？」

「散歩。自分も来い^き」

一応会社の社長である美香だが、本人に葬儀屋という仕事をする気がないためにこうしてふらりと出かける事が多々あった。こういつた時は左之助が留守番をするのが常だが、今回は彼女の気まぐれにつき同行する事となっている。

ふらふらと恐らく宛てもない散歩を続けていた二人が辿り着いた雑木林で、左之助が口を開いた。

「火車さん……ここ、なんかいません？」

「おるねえ。怖いんか？ このウドの大木が。いい加減慣れなアカンで」

にいつ、と唇を吊り上げた彼女の言葉に左之助が硬直した。ガタイの大きいこの男は、その外見に反して所謂怖い話が苦手だった。ちなみに美香は全く以って平気で、よくそういった話をして彼をからかう。

「おー、あそこに随分と懐かしいもんがおるで」

のんきな声で雑木林の一角を指差した美香に、左之助が飛び上がった。

「やめてくださいやめてください！ 俺、まだ食べられたくないです……ってあれ？ あいつは……」

それは鳥のような「ナニカ」だった。

人間のような顔。曲がった嘴にはのこぎりに似た歯が並び、蛇のような身体をしていた。両足の爪は触れればたちまち切れそうなくらいに鋭いのが遠目にもわかる。

「以津真天いづまてんやなあ。よっ、お久しゅう！ 六十年振りくらいやな。ウチの事覚えとる？」

以津真天。

いつまで、あるいはいつまでもと呼ばれるこの人外は、江戸時代は鳥山石燕の『今昔図画続百鬼』に描かれた妖鳥だ。

「火車さん、あの以津真天って多分元人間ですよ？ ってかそんなモノとまでお知り合いだったとは」

戦争や飢餓で死んだ人間の死体を長い事放っておくと、この妖鳥が死体の近くに止まって「いつまで死体を放っておくのか」という意味で「いつまで、いつまで」と啼くという。この世に存在し始めた時からそのようにある「妖怪としての以津真天」もいながら、中には「死体を放っておかれた人間の怨霊が鳥と化した以津真天」もいた。この場合は、後者だったらしい。

「なんで以津真天と知り合いかって？ アホやなあ、自分。妖怪カ火車シャたるウチにとって、死体をなんとかしてくれ〜言うこいつらしい客や！」

ベレー帽を取って悪戯っぽく笑った彼女は人間ではない。そして、その横のため息をつく彼もまた。

プロローグ：猫の葬儀屋と狐と、日常。（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

六十年前というのは、言うまでもなく太平洋戦争のことです。

プロローグ2：猫の葬儀屋と狐と、家に帰れない鳥

彼女は御歳千歳を超えようかという大妖怪・火車である。この火車という妖怪は、元々悪行を積み重ねた人間の死体を葬儀や墓場から奪うとされる妖怪だ。猫又が正体と言われている通り、彼女の本来の姿は五尾の尾を持つ金目の黒猫である。

そんな彼女に同行する彼も勿論人ではなく、元々は妖狐の一類で呪いを運ぶ使い魔である飯綱だ。主である術者を失い、本来なら主と共に消えるところをなぜか消えずに世に留まった。かといって使い魔に自分から事を起こすという考えそのものがなく、野垂れ死にしそうになった所を当時は「春火^{ハルカ}」と名乗っていた美香に拾われた。人外二人の付き合いも、かれこれ三百年ほどになる。とはいえ常に一緒だった訳でもないのです、さすがの彼も彼女が以津真天と知り合いだとは思っていなかった。

「にしても、今のこの世に以津真天なんて珍しいですね」

現代の世において、死体を放置される事など少ない。その事に首を傾げつつも元人間とはいえ、既知（大雑把には一応知っていた）の妖怪を見て安心した左之助の言葉を美香が笑い飛ばした。

「今でも以津真天はおるで？ このあんちゃんの場合、バラされて埋められてそのまんまみたいやな」

「さ、殺人事件なんですか!？」

驚くと同時に、葬儀をあげて欲しくて「いつまで、いつまで」と啼くこの妖鳥の性質を思えば当然かと左之助は思った。

この世に生を受けて早三百年。まだまだ世界は不思議で溢れているようだ。

「ま、この以津真天は成仏させたげましょ。ほれ、下がりの」

言われるままに下がる彼に彼女はニヤリ、と猫のように笑った。そして、どこから取り出した扇子を開く。

ぱん！と音がして、雑木林を熱のない人間には見えない焰が包んだ。一端火勢が収まった時には、彼女はもう「火車美香」ではなく「妖怪・火車」に変貌していた。

切れ長の金の瞳。黒地に曼珠沙華まんじゅしゃげが散り赤い蝶が遊ぶ着物。臙脂の帯に、金の帯紐。黒い漆塗りの下駄に、緋色の鼻緒。鴉の濡れ羽色の髪は長く下ろされ、肌の白さも相まって妖艶な気品を与えていた。

「いつ見ても、綺麗だなあ……………」

ぼつり、と呟いた左之助の言葉は本人には聞こえない。

「いつまで、いつまで、いつまでいつまでイツマデー!!」

以津真天が妖気を進らせながら、火車へと突っ込んでいった。対する彼女はただ、扇子で口元を隠し不敵に嗤うだけ。

「さてと、ええ加減に往生しい？ 葬式は、ちゃんとうちがあげといたるから」

彼女は妖艶に嗤ってから、ぱちん！と以津真天に向けて開いた扇子を閉じた。

轟、と舞った炎の華が以津真天を包み、それが消えた後には露出した土と白骨化した物言わぬ屍だけが残る。

美香はしゃがみ込んで、露出した頭蓋骨を撫でる。

それは例えるなら、母が眠る幼子の頭を撫でるように。

あるいは、今までの苦労を労わるように。

「ちゃんとうち、葬式はあげてやるからなあ……………」

飯綱、警察に連絡。

そう言った彼女の瞳は凧のように透明で、感情の色は見えなかった。

「またアンタかい、葬儀屋」

「お久しゅう。またおうたな、ポチあんちゃん」

白骨死体発見の報に駆けつけた警官に見知った顔を見つけ、美香が声をかける前に向こうから声をかけられた。警察が来る前に彼女は人間に化けているので、今の彼女はベレー帽にセーラー服姿だ。のんきに手を振る彼女に、ため息をつく男の名前はイヌツカヨシオ犬塚義男。二人が暮らす篠宮町を管轄とする警察の刑事だ。

「犬塚だ、い・ぬ・つ・か！ おい兄ちゃん、この娘なんとかしてくれるか？」

「無理です」

騒がしいのが苦手な左之助は、少し離れた木にもたれながら即答した。

「お前は死神か？ それとも歩く死体発見器か？ そうでもないとお前らの死体遭遇率は異常だぞ？」

「さあー、ウチはなんも知らへんよ？」

「嘘つけ！ 半月で七回も死体見つけるっておかしいだろ！」

「ウチの本業は葬儀屋やさかい、むしろ商売の足しになって万々歳や〜」

厳しく追求する義男と、それをのらりくらりとかわす美香。左之助はその喧騒を聞きながら、ふと空を見上げた。

この青い空を、あの以津真天はどこまで昇ったのだろうか。妖怪としての力を振るった彼女の姿を脳裏に思い浮かべながら、彼はし

ばらく空を見続けていた。

プロローグ2：猫の葬儀屋と狐と、家に帰れない鳥。 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

猫の葬儀屋と狐と、彼らの人となり。(前書き)

人物設定になります。

随時更新予定になります。

猫の葬儀屋と狐と、彼らの人となり。

・ ヒグルマミカ
火車美香

悪人を攫ったり、死体を葬式や墓場から持って行ってそれを喰らうとされる妖怪・火車カシヤの少女。

外見は16から18だが、実年齢は1000歳近い。

普段は桜色のベレー帽を被り、白いセーラー服を着ている（セーラー服は着ているだけで、学校には通ってない）。

が、法事の際には黒い着物を着る。

この際の家紋は、かつての姫路城城主の家紋であった揚羽蝶。

セーラー服の時には三つ編みにしているが、着物の時は簪を挿すかただ伸ばして垂らすだけ。

火車として力を振るう際には、黒髪金目の女が赤い着物に赤い扇子を持った姿になる。

だがこれは化けた姿で、本来は黒毛に金目で5本の尻尾を持った猫（ある程度大きさは変えられる）

彼女の火は妖怪や負の感情、陰の気『のみ』を燃やすこともできれば、普通の火のように物を燃やすこともできる。

温度調整は自由自在。中には『熱のない炎』という変り種も。

一人称は「ウチ」。

播磨国（今の兵庫県姫路市あたり）出身なので関西弁。

とはいえ、最後に故郷に帰ったのが戦時中な上に日本中をうろつろしていたのでたまに変な日本語になる。

好奇心の赴くままに行動する、ゴーインググマーウエイなお方。
篠宮町を管轄とする警察署に勤める刑事・犬塚義男イヌツカヨシオを会うたびに
からかって遊ぶ。妖怪としての業なのか、死体の第一発見者になる
ことが多い。

そのことを犬塚には怪しまれている。

人間としての戦闘能力も高く、過去に武器を持った男50人と戦
って勝ったことがある。（この時は奪刀術を使った）

・飯綱左之助イツナサノスケ

管狐くだぎつねのように人に使われるとされる妖怪・飯綱イツナの男。

外見は30代から40代。実年齢は300歳ほど。

普段はグレーのスーツを着用。法事の際は黒いスーツを着る。

気苦労からか、ここ数十年で髪に白い物が混じり始めた。

妖怪としての力で戦闘をすることはあまりない。（というか、本
人にする気がない）

人間の姿でも大の男10人を相手取って徒手空拳で勝てる。

が、美香には口でも頭でも力でも勝ったことがない。

唯一勝てるのは変化くらい。

むしろ勝てないと狐の沽券にかかわるので意地である。

元は主が死んだあとになぜか消えずに残った使い魔。拾われた当初は自主性のじの字もない受身な性格だったが、今は美香の手綱を取るべく苦心するあたりまで成長した。

美香と一緒に死体の第一発見者になることが多い。

犬塚にはセットで覚えられている。

東北出身なので、座敷童子を筆頭とする東北の妖怪とは馴染みやすい。

イヌツカヨシオ
・犬塚義男

混じりっ気ない人間で、火車葬儀社の2人が居を構える篠宮町を管轄とする警察署の刑事。

美香に遊ばれる、可哀想な人。

彼自身は篠宮町の生まれだが、本家は九州にある。

美香たちとの遭遇率は異常なほど。

だが本人としては、2人に死体発見率の方が異常なのでその事実には気づいていない。

猫の葬儀屋と狐と、東北。（前書き）

ここから新章になり、本格的に物語がスタートです。
今回は東北まで行きます。

猫の葬儀屋と狐と、東北。

東北某県・新幹線乗り場。平日の昼間には似合わない二人組が、東北の地へと降り立った。

「やっと着いたなあ、東北！ あー疲れた」

一人は、季節を思うとうっすらと肌寒い気温に艶やかな黒髪を遊ばせていた。半袖の白いセーラー服に桜色のベレー帽を被っていて、その奥の炎のようにきらめく瞳を隠している。帽子のつばが影となつて隠していたものの、十六から十八程に見えるその顔立ちが整つた物である事がわかつた。

「人に荷物全部持たせておいてその台詞ですか、ヒケルマ火車さん……」

その後ろから出てきたもう一人は、白い物が混じり始めた黒髪に、グレーのスーツを着た三十代半ば程の男だつた。全体的に疲れた様子で、肩といわず背といわず大量の荷物を抱えている。その三分の一は仕事道具だつたが、残りは殆どが火車と呼ばれた少女の物だつた。

「あんたは力あるし、別にええやる？ それとも、こゝんなにいたいけで可憐な少女にそゝんな重い荷物持たせる気い？ ええ度胸やな、飯綱イッナ」

にやにやと意地の悪い笑みを浮かべて、少女は男を見る。飯綱と呼ばれた男は疲れた様子でため息をつく、「今日は仕事で来たんですよ?」とだけ言った。

「分かつとるよお。ウチはこの佐倉家の葬儀手伝うんが仕事。余計な事はせえへんって」

関西人独特のイントネーションで、少女はひらひらと手を振った。漫才師のようなやり取りを繰り返す二人の元に、一人の女性が声をかける。

「あの、ヒゲルマソウギンヤ 火車葬儀社の方ですか?」

少女が振り返ると、そこには黒い和服 商売柄見慣れている彼女には、喪服なのだとすぐに分かった を着た女性が立っていた。

女は黒い和服に金の帯締めをしていて、豊かな黒髪を簪で結い上げている。

その顔は典型的な日本人顔だが、目の下に隈ができているなど全体的に疲労の色が濃かった。

「ええ、ウチらが火車葬儀社のモンです。あんさんが依頼人のサクラ佐倉ミオさんでええからつか?」

年端もいかない少女が社長と言われ、案の定彼女は面食らった顔になった。

当の美香は慣れているので、その反応にも驚かない。

「にしても、なんで地元の葬儀屋に頼まなかつたんやろか? 東北こうち

にも葬儀屋はあるやる?」

だが、美香の言葉に漣は首を横に振った。

「いえ……それが、地元の葬儀屋は皆嫌がってしまっ……」

「何? 『ナニカ』 得体の知れへん物でも出るの?」

す、とその瞳を猫のように細めた美香が聞く。

それに対して、漣は頷き……その『怪異』を、告げた。

「どうしても……死んだ父の出棺が、出来ないんです」

猫の葬儀屋と狐と、東北。(後書き)

読んでくださりありがとうございます。

猫の葬儀屋と狐と、黒い女。

「出棺がでけへんって、どういう事？」

「それは屋敷までの道中に、追々話させていただきました。さ、こちらの車に」

一行が駅を出ると、黒塗りの高級外車が一台ドアを開けた。

「澪さん！　こちらの方々は？」

車から降りて来たのは、これまた和服の女性。

澪よりもよく言えばふくよか、悪く言えば減量を薦めたい体型の彼女は、乱暴に黒髪をひつつめて、やはり黒無地五つ紋つきの着物を着ていた。歳は四十を確実に越しているだろう。

「なんや、娼婦崩れみたいな女やな」

「ちよつ、火車さん！？　失礼ですよ！」

後ろで交わされる小声の会話を聞きつけたのか、彼女はきつ、と鋭い眼差しを向けた。

「火車葬儀社の方々です。こちらの女性が社長の火車美香さん。お隣の男性がそのアシスタントの飯綱左之助さん」

澪が二人を紹介する。その様子にも、育ちの良さが垣間見えていた。

「よろしくお願ひします」

美香が珍しく標準語で挨拶した。この女性に関西弁で一番汚いという汚名まである播州弁ばんしゅうべんで話そうものなら、確実に視線の攻撃が飛ぶと思つた上での判断だ。

「まあ、こんな小さな子が社長？　お嬢ちゃんお幾つなの？」

あまりにも甘つたるい猫撫で声に、美香が「寒っ！」と鳥肌を立てた。額に青筋を浮かべ、密かに拳を握る。

相手が気に食わなければ財界の大物だろうが警官だろうが容赦なく殴り飛ばす彼女の悪癖を知る左之助は慌てて「火車さん！」と抑えにかかった。

「私は顔が子供っぽいとよく言われるのですが、もう二十二です。お酒も呑めますよ？」

「あら、そうなの？」

女の人を小馬鹿にした態度に唇を引き攣られながら、美香は笑つた。口を開いた途端に彼女への罵詈雑言が飛ぶのが目に見えているので、できる限り言葉を抑える。

「で、誰？」

感情を押し殺した声で、美香が聞いた。きよとんとした女に、言葉が足りないと思つた左之助が言葉を足す。

「あの、先程濤さんには自己紹介していただいたのですが、名前が分からない事にはこちらもどう呼んでいいのやら……」

美香がむすつと不機嫌なまま、無言で名乗りを促す。完全に忘れていたらしい女は黒い着物の袖を口元に添えて含み笑いを零すと、どこか艶っぽく名乗った。

「私は佐倉家当主代行、佐倉芽衣と申します。以後、よしなに……」

芽衣と名乗った女に見えないよう美香は唇を尖らせ、「ここは京都なん？ それとも廓？ なんのつもりや、けったくそ悪い」と呟いた。

「火車さん、殴っちゃダメですよ？」

左之助が念を押すと、美香は車に乗り込みながら「わかつとるわ、ダボ！」とお国言葉で怒鳴った。

彼女に「ダボ（アホの強調形）」と言われるのは慣れているので、左之助は「はいはい」と苦笑して車に乗り込んだ。

今しばし、お国言葉は封印である。

猫の葬儀屋と狐と、黒い女。（後書き）

実験的ではありませんが、ぽつぽつ播州弁を混ぜて話させてみました。播州弁で書いて、ルビで標準語の意味を振っています。

一応調べはしましたが、間違っていたらどうぞ姫路の方、ツッコんでやってください。

読んでいただき、ありがとうございます。

猫の葬儀屋と狐と、旧家。(前書き)

サブタイトル決めるのに苦労しましたw

猫の葬儀屋と狐と、旧家。

「佐倉サクラの家は、東北で代々続く職人の家系です」

ヒゲルマンソウギシャ 火車葬儀社の二人は、家に着くまでの道中に依頼人・佐倉サクラミオ 澪からこれから向かう佐倉家の説明を受けていた。黒塗りの高級車に乗りながらも、二人の態度は平然としている。

「何の職人？」

言葉少なに美香が尋ねた。葬儀でない所であえて標準語を話そうとすると、何故か言葉が少なくなってしまうのは彼女にも制御できない。

「人形師です。ひな人形や五月人形、あとは日本人形も」

「それって、市松人形とかですか？」

澪の言葉に左之助が震える声を出したのは、日本人形の怪異を思い出したからだろう。話に関わりたくないという意味表示のつもりなのか、窓の外に視線を向けていた。ちなみに、窓の外は篠宮町と大差ない住宅街だ。

「ええ。ちなみに菊人形も作っています」

「い、犬神家の一族……」と呟いた左之助が耳を塞ぐ。一瞬振り返って見た美香がいかにも怪談話をしそうな雰囲気なのを感じ取って、自分に致命的な話を逸らすべく疑問を投げかけた。

「澪さん、駅に近い辺りはともかく東北も都会になりましたね」

左之助は東北の生まれだった。彼が覚えている一番古い景色は三百年前の物だったが、時々依頼や美香の都合などで東北に来る度に変わっていく故郷に泣きたいような気持ちになっていた。

胸をわしづかみにされたようなその感情の名前を、彼は知っている。隣に座る美香は、自分の三倍以上生きている彼女は、自分よりその思いも強いのだろうか。

かつて自分が暮らしていた山の上に建てられた姫路城を白鷺城と自慢する時、やはり胸がわしづかみにされるような気持ちになるのだろうか。

「ええ。飯綱さんは東北の生まれですか？」

こくり、と左之助は頷いた。そして手短かに、「岩手の生まれです」と告げた。

「そうですね……地元を離れた人にとって、建物や風景が移り変わっていくのは寂しいでしょうね」

澪はそう言って、美香の方を向いた。

「火車さんは、どこのご出身なんですか？」

「私の生まれは播州姫路。ハンシュウヒメジ 白鷺城のお膝元、です」ハクロジヨウ

話を向けられて、美香は言いにくそうに標準語で答えた。

「白鷺城、ハクロジヨウ つて姫路城ですか？ シラサギシヨウ 白鷺城ではなく？」

「白い漆喰がとても綺麗だから、と付けられたあだ名です。あと、城の異名は音読が普通なんです。まあ、あまり知られてないようですが」

へえ、と漣は感嘆の声を上げた。言葉こそ丁寧だが、美香の瞳はきらきらと輝いている。やはり、地元に自慢できる物があるのは嬉しいようだ。

「お二方、漣」

前の席に座って会話に入らずにいた佐倉家当主代行・佐倉芽衣サクラメイが声を掛けた。

「佐倉の屋敷に到着致しました」

そこには、古き良き昔の面影を残した大きな屋敷があった。大きな門と茅葺きの屋根を持つ純日本風な屋敷の門を車で潜った途端、二人にしか感じられない視線が家から感じられた。

「飯綱、ここに何がいるか分かる？」

「とりあえず、この規模なら確実に家鳴ヤナリがいますね。あとはもしかしてもしかすると、座敷ザンキフロぼっこも」

左之助が答えたのは、旧家と呼ばれるだろうこの家にいるだろう妖怪の名前だ。

家鳴りという妖怪は現代で言うところのポルターガイストで、悪戯をして家を揺すったり、音を立てたりする小さな妖怪を指す。ちなみに、県としては美香の故郷である兵庫県北部（当時は但馬国と言つて播磨の隣国だった）にも家鳴りの話が伝わっている。比較的あちこちに伝承される妖怪だ。

座敷童子は有名な東北の妖怪で、座敷童子のいる家は栄えるが、去った途端に家を衰退させると言われている。後者は特に、飯綱に馴染み深い妖怪だ。

「懐かしい？」

「ええ。同郷ですし、ある意味では似たもの同士ですから」

家にいる間は福を呼ぶが、去り際に家運を傾ける妖怪。一部の学者は、それを妖怪としての飯綱や犬神といった憑き物と座敷童子を見方を変えた同じモノとしていた。

「お帰りなさいませ、芽衣様、漣様」

鶯色の小袖を着た女性が、そう言つて車のドアを開けた。芽衣と漣が続いて、二人も降りる。

「お客様ですか、佐倉家にようこそいらっしやいました」

そう言つて女性は二人にも頭を下げた。

「火車葬儀社社長、火車美香です」

「同じく従業員、飯綱左之助です」

佐倉家の古風な屋敷は、威圧感に似た重さを持って二人を出迎えた。

猫の葬儀屋と狐と、旧家。(後書き)

読んでくださりありがとうございます。
いよいよ屋敷に乗り込みますw

猫の葬儀屋と狐と、佐倉家。(前書き)

飯綱のオッサンがかわいそうになってきた昨今。

猫の葬儀屋と狐と、佐倉家。

佐倉家の屋敷は、百年単位の時間を感じるには十分な貫禄を持った建物だった。洋装の人も多いが、門から見える鶯色の小袖を着た使用人の方がやはり絵にはなる。

「これまた、ご立派なお屋敷で！　ここまで純日本風な屋敷も珍しいですね」

美香が素直に感嘆の声を上げた。ベレー帽から覗く瞳も、驚愕で見開かれている。

「しかも茅葺きの屋根と来た！　維持するの、大変でしょう」

今のご時世、一個人の家が茅葺きの屋根というのも珍しい。茅という素材の性質上、どうしても定期的に取り替える必要があるからだ。

「……火車さん、当主さんが怖い笑顔でこっち向いていますよ」

芽衣の名前呼びは絶望的なのが目に見えているので、「当主」と呼ぶ事にした飯綱だった。

「あー、はいはい。飯綱、こっちが向こうを感知できるように向こ

「うもこつちを感知できる？」

美香はスタスタと玄関へ歩き出す。ええっと、と美香に聞かれた飯綱は自分の経験から自分達の素性が知られるかどうか考え始めた。まず第一に、沢山いるであろう家鳴達。彼らは総じて知能が低く、大体の家鳴は“自分”という概念すら希薄だ。そのため、シロ。

次にいるかは分からないが可能性としてはありえる座敷童子。あの子供達は種類にもよるがとりあえず人間並みの知能がある。面白がつてくれればそれでいいものの、客人が格上の相手（飯綱は怪しいが、美香は確実に格上だ）と分かった時どうなるのが読めない。グレー、と言った所だろうか。

「家鳴は多分大丈夫です。ネックは座敷童子……まあ、いたらの話ですが」

「お二方、こちらに」

芽衣の言葉に「はい！ 今行きます！」と美香が片手を上げて言った。

「要は、こつちが大人しくしていればいいんやろ？ 大丈夫大丈夫」

ヒラヒラと手を振るその様子が一番不安で、歩き出しながらも飯綱はため息をついた。

佐倉の家の中は、和風でありながらも明るい室内だった。

くすくす……

くすくすくす……

子供の笑い声が響く。家鳴だろうか、と美香は検討をつけた。家鳴が家人にも聞こえるように鳴らしているのだろうか、ピキン、パキンと音がする。

「お二方には、こちらの部屋に泊まっていただきます。お手洗いは部屋を出て右手の突き当たりで、食事は廊下を左に歩いてから右手の部屋に広間がありますのでそちらに行ってください。お風呂は時間になった時呼びに参ります」

二人は驚色の小袖を着た女性に部屋へと案内されていた。彼女の髪は夜のように黒く、その瞳は闇のように深い。古きよき大和撫子のイメージに近い。

抜けるような雪のような肌の白さが、ひどく印象的な女だった。

「あなた、名前は？」

美香は自分達も名乗ってから、使用人の女性に名前を聞いた。

「申し遅れました、私の名前は雪姫氷柱ユキヒメツツラと申します。どうぞお見知りおきを、火車様、飯綱様」

氷柱と名乗った女性はそういつて優雅に頭を下げた。

「飯綱、気づいとる？」

彼女が去った後、美香が目を細めて聞く。頷いた飯綱を横目に見て、猫のようにきゅっつと瞳を細めた彼女は確かに嗤っていた。それは、面白い物を見つけた子供のように。あるいは、獲物を見つけた獣のように。

「あの子　　妖怪やで？」

猫の葬儀屋と狐と、佐倉家。（後書き）

妖怪な使用人女性登場。

次回は・・・どうなるんだろ？

一人、この小説をお気に入り小説に登録してくださった方がいました。

顔も名前もわからないその方に、心からの感謝を。

これからも頑張らせていただきます！

猫の葬儀屋と狐と、雪を操るモノ。(前書き)

思いがけず説明が長引いたので分割。

本当はもう少し先まで一気に更新する予定でした。

猫の葬儀屋と狐と、雪を操るモノ。

「あの人、雪女ですかね？」

部屋の周囲に誰もいない事を確認してから、左之助は美香に尋ねた。美香は柱に背中をもたれさせ、腕を組んでいる。

「さあなあ・・・ウチに言えるんは、あのコが氷雪系の妖怪やって事だけや。雰囲気は穏やかやから、雪女っちゅーより雪女郎か氷柱女やな」

芽衣がいないからと、美香の言葉は播州弁に戻っていた。

雪女は言わずと知れた雪国の妖怪。雪の精とも雪の中行き倒れた女の霊とも言われるこの美しい妖怪は、吹雪の中に赤子を抱いて現れる。道行く者に腕の中の赤子を抱いて欲しいと言うが、請われるままに赤子を抱くとこの赤子が段々と重くなるのだ。雪女は男がその赤子（実際は雪の固まりや氷柱）を抱いている間にその男を喰らう。

雪女郎は雪の固まりや氷柱の赤子を抱かせる所までは同じであるものの、赤子の重みに耐えきると怪力や名刀を授けると言われている。また、福島県磐城地方の雪女郎は谷に落ちて霊が雪に閉じこめられ雪女郎になると言われ、雪のある崖道でこの妖怪に背を向けると谷底に突き落とされてしまうと伝えられていた。

つらら女というのは、軒先のつららが人間ほどの大きさになると現れる色白の美しい娘の妖怪だ。家に独身の男がいれば押しかけ女

房になってしまふ。風呂に入りたがらない娘を無理に風呂に入れると、浴槽に氷柱と櫛を残して消えるのが共通点だ。

「雪女でも雪女郎でもつらら女でも、火車さんは迂闊に近づけませんね。人間として生活しているっぽい彼女を、うっかり溶かしてしまふ訳にはいきませんし」

対する美香は炎を纏い悪人を迎え死体を喰らう妖怪・火車。その相性は言つまでもなく最悪だ。

「やから、ウチも気いつけるよ！　この際氷っ娘こはええとして・・・」

美香は言葉を切り、セーラー服の袖を握りしめた。

「何やあの女、け腹が立つつたくそ悪い！　飯綱、覚悟はええ？」

「ちよつ、待つ、何で俺に矛先向けるんですか!？」

「お客に喧嘩売る訳にもいかんやろ!」

凶悪な笑顔を浮かべた美香に、飯綱は迷う事なく両手を上げた。無論、口で反論する事も忘れない。

「それ、かなり常識ですから！　さも偉いと言わんばかりに言わないで下さい!」

飯綱は涙目になっていた。

「・・・ま、ええわ。荷解きするで〜」

「俺の事は無視ですか!？」

やいやいと騒ぐ左之助を尻目に、美香はさつさと荷解きを始める。自分の思うまま、欲望と興味の赴くままに行動するその様子は確かに、猫らしい行動だった。

「はぁ・・・」

左之助はため息をつき、自分の分の荷物を解き始めた。いつもの事なので、咎めるだけ無駄と諦めているとも言える。

「 火車様、飯綱様。浴場へとご案内します。お二人とも佐倉家の方が一緒になります。構いませんか? 」

呼びに来たのは氷柱だった。二人は解いた荷の中から下着と着替えを取り出し、部屋の扉を開ける。氷柱はやはり冷たい美しさを持った女だったが、雪を操り氷を生じさせる妖と言われればなるほどそれらしい美しさを持っていた。

「こちらの家の方々も? 何故? 」

一応は標準語に直して、美香は聞く。氷柱は感情を感じさせない声で「それが佐倉の方々の意向です」と答えた。

地元の者が来ようとしな中葬儀を引き受けてくれたのが、女子高生にしか見えない女と冴えないというかつのあがらない中年男。興味を持たれない方が怪しい組み合わせだ。

「わかりました。飯綱もいい？」

美香の確認に飯綱は首肯を返す。氷柱は能面のような無表情で「こちらになります」と二人を先導して歩き始めた。

「アンタ、風呂には入らんの？・・・まあ、アンタらが風呂に入ったら溶けてまうからな。これからも気いつけや」

浴場（きちんと男女の区別がされていた）に着いて氷柱が去る間際、追い越し際に美香は低い声で氷柱に囁いた。

「一体、どういう・・・！」

驚愕に彩られた氷柱の声を無視して、美香は右手を振りつつ浴場へと消えた。飯綱は「うちの社長がすいません」と小さく頭を下げて浴場に消える。

「彼女達も、もしや？」

風呂に入りに行ったあたり、自分の同胞ではない。だが、人間でない事は確実だ。氷柱は文字通りの意味で氷のようにつめたい自分の手を握りながら、不思議な訪問者がこの家にどんな影響をもたらそうとしているのかを考えていた。

猫の葬儀屋と狐と、雪を操るモノ。(後書き)

次回、お風呂の回。

というのは決まったものの、はたして上手く書けるのやら(笑)
読んでいただきありがとうございます。

猫の葬儀屋と狐と、お風呂。(前書き)

1ヶ月近く放置して申し訳ありません！

お気に入り小説に登録してくださった方が2人になりました。
登録してくださった方に、心からの感謝を。

猫の葬儀屋と狐と、お風呂。

「……これ、ホントに一人の家のお風呂？」

持参した入浴セット（フェイスタオル・タオル・携帯用ボディソープ・同リンス入りシャンプー・洗顔剤の5点をビニール製のポーチを入れた物）を片手に浴場のドアをくぐった美香の第一声に、先に風呂に入っていた女達が笑った。

「アハハハハハ！　大きいだろう？　先々代が作ったこの風呂はウチの自慢さ！」

体格のいい女がそう言って、美香を手招きする。美香は軽く湯を被ってから「失礼します」と言って木製の浴槽に浸かった。

「気持ちいい、し……いい匂い」

標準語を意識する分どうしても途切れ途切れになる言葉で感想を紡ぐと、女達　ぱっと見る限り、澪と芽衣はいないようだが嬉しそうにまた笑った。

「嬢ちゃん、無理して標準語にする必要はないさね！　私は葉宮^{ハミ}麻矢^{ヤマヤ}。澪の従姉妹で、普段は愛知にいるじゃん。嬢ちゃんも本当は標準語じゃあないなら、この風呂の間だけでも言葉を戻しん」

麻矢の言葉使いは中部の者の響きで、美香はふとかのヘタレを思い出した。奴が天下を統一と聞いた時は、なんの冗談かと思つたものだ。

「なら、お言葉に甘えて　葉宮さん、三河の人なんやな。改めてまして、ウチは火車美香ヒグルマミカ！　兵庫県は姫路の出身でバリバリの関西人や！　よろしゅうお頼申します」

先程までのどこか緊張した雰囲気を見事に壊して、美香はへらりと笑つて挨拶をした。関西人に人見知りほど無縁な言葉はそうそくない。

「にしても、こんな若い嬢ちゃんが葬儀社の社長さんなんてね！　世の中不思議な事もあるもんだね」

美香は女の一人にドン！と背中を叩れて湯に沈みかけた。

「何すんのや！？　ウチ、葬儀挙げて来た葬儀屋なのに危うく自分が葬儀挙げられる所やったで！」

「あらあら、それはごめんよ」

からからと笑つた女は神楽凜カクラリンと名乗つた。横の女はその妹で、麗レイだと名乗る。凜とは従姉妹だと言い、東京生まれの東京育ちらしくちゃきちゃきの江戸っ子だと言つた。

「皆、普段は方言と標準語の基準はどこではるんですか？　参考までにウチの場合を言つと、普段はバリバリ播州弁使つとるんやけど、法事ン時とそーゆーンが嫌いそーな人ン時は標準語や！」

「そーゆーンが嫌いそうな人」のくだりで芽衣を思い出したのか、女達はまた豪快に笑う。

「あー、芽衣さんみたいなのはアタシも標準語を使うね！あとは確実に誤解を招くって分かつとる言い回しも！」

そう言った麻矢に、美香は「『えらい』とかやる？確かにあれは、よお誤解を招くもんなあ」と言った。分かっている様子神楽姉妹に美香は解説を入れる。

「滋賀とか愛知とかの中部辺りではなく、『えらい』って言葉を『疲れた』って意味で使つとるん。ウチの播州弁でも使うんよ」

故に美香や麻矢は『えらい』の使い方に気を使う。美香もかつては、『えらい』の言葉を正しい意味で捉えられずにトラブルになったものだ。

「アタイらもTPOはわきまえる江戸っ子でい！標準語 芽衣サンみてえな人にはちゃ〜んとつまんねえコトバで話しやす！」

姉妹を代表して、凜が言う。結局の所、大体の認識は共通のようだった。

「そーいえば、男性陣もやっぱ普段は標準語なんですか？」

一端浴槽から上がり、そのすらりとしなやかで白い身体を持参した入浴セットで洗いながら、美香は尋ねる。ゆつくり温まってから出るつもりなの浴槽にしっかり浸かっている麻矢や神楽姉妹が、その問いに答えた。

「あいつらは使い分けができなくて、よく芽衣さんに怒られています。てんから阿呆な奴らだぜ！」

美香としてはこの姉妹の方が少々心配なのだが、男性諸氏は更に酷いらしい。

「鍋やるべー！」

「「「「鍋やるべー！」「「「「

一方その頃男湯では、奇しくも東北男児の集まりと化していた。やっと故郷の訛りが聞けて喜ぶ左之助が音頭を取り、芋煮会を発案していた事を追記しておこう。

猫の葬儀屋と狐と、お風呂。(後書き)

あんまりお風呂だからって何かがある訳ではなかった！ごめんなさい！

この1ヶ月の間に「もう一人の子供」を通り越して新章書いてしまつてましたw

次からはもう少しペースを上げていきたいです・・・

最低でも、半月に1回は・・・

猫の葬儀屋と狐と、子供。(前書き)

お気に入りが増えている・・・だと・・・？
ありがとうございますっ！

猫の葬儀屋と狐と、子供。

「はっつ、いいお湯やった〜・・・つと、そろそろ言葉を戻さない
と」

持参した服に着替えて、風呂から上がった美香はため息をついた。柿渋染めの着流しを着た美香は、凜達と一旦別れて部屋に戻る。周囲には女子高生として認識されているが芽衣や澪には成人していると告げているので、風呂上りの一服を愉しむべく部屋の煙管を取りに行こうと決めた。下手をすれば屋内で迷いかねない所を千年の人生経験でカバーしつつ、美香は初夏にしてはひんやりと冷たい廊下を歩いた。

着流しの上に羽織りを重ね、首に白いタオルを下げている様子は、日本家屋の廊下という状況と相まって温泉旅館にいるような錯覚を受ける。

あとはもうこの角を曲がれば与えられた部屋、という所で美香は誰かにぶつかった。

「つと、怪我はない？」

「う、うん・・・おねーさん、だあれ？」

美香がぶつかったのは、鈍色にびいろの着流しに深緑の兵児帯へいごひを締めた子供だった。短く黒髪を切り揃えて、黒い瞳をくりくりとさせた可愛いらしい子供だ。美香はしゃがみ込んで、子供の目線に近づいた。

「私は佐倉澪さんに頼まれて来た葬儀屋で、火車美香です」

「僕、カケラヨウイチ神楽要一。ねえお姉さん、チヨ千代ちゃんっていう赤い着物の女の子を見てない？　僕捜してるんだ」

子供　　要一は、美香の着物の袖を引つ張ってそう聞いた。何も見ていない美香は、首を横に振る。

「人が亡くなった法事の場に、赤い着物なんて・・・不謹慎な子」

「フキンシン？」

その場にはその場に相応しい服がある。赤い着物なんて、人が亡くなった家で着る物じゃない。美香はその事を、まだ幼い少年に教えてあげた。

「じゃあ、僕の格好はフキンシンじゃない？」

心配そうな要一に、美香はその服なら問題ないと言った。ついでに、要一からこの家の情報をいくつか聞き出す。

「それでは、私はこのへやなので」

「美香お姉さん、ばいばい！」

手を振ってくれた要一に手を振り返しながら、美香は考えを纏める為に少し部屋に籠ろうと決めた。

「ただいま戻りました、火車さん・・・うわ、煙いですね。何か発見があつたんですか？」

左之助が同郷の男共と盛り上がり珍しく話し込んだ後、部屋に戻ると美香が煙管を吹かしていた。愛用の赤い柄の煙管は不謹慎と思つたのか、もう一つの黒い柄の煙管である。更には蒔絵の煙管盆もちやつかり用意してあつた。ちなみに、どちらも数百年レベルでの愛用品だ。左之助が美香と行動を共にする頃にはすでに使っていて、本人曰く「長壁姫オサカベヒメ（姫路城天守閣に棲むという化け狐）からの贈り物」だと言つ。

美香が煙管を吹かすのは趣味ではあるが、考えを纏める時にも吹かしていた。これは一種の癖のようで、一所に長く住めない自分たちが次はどこに行くのかを決める時は地図を眺めながら紫煙をくゆらせていたものだ。

「ここの家の子おに会つた。千代つて子供を捜しておつたんやけど・・・ウチの推測が正しければ、その子は座敷童子ザンキワラシやるーな」

美香はそう言つて、ふう〜と紫煙を吐き出した。柿渋の着流しを着た少女だと言つのに、彼女の堂々とした振る舞いは遊郭の花魁に匹敵していた。

「座敷童子ザンキワラシなら、夜になればこの部屋に来るでしょうね。お客と遊ぼうとして」

左之助の様子は心なしかぐつたりとしている。彼が過去、座敷童子に散々遊ばれていた事を知る美香は足をばたつかせて笑つた。

「アンタは、よう座敷童子から好かれる性質タチのようやからねえ」

今晚の事を考えて憂鬱になる左之助の耳に、氷柱から「夕食の準備が出来ました」という声が聞こえた。

猫の葬儀屋と狐と、子供。(後書き)

左之助が「座敷童子」を「座敷ぼっこ」というのは彼が岩手県内陸部の出身だからであり、現にそこでは座敷ぼっこというそうです。

・・・もっと更新速度を上げるべくがんばります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4349x/>

猫の葬儀屋と狐と妖。

2011年12月29日15時45分発行